

『源経氏歌集』 四季部注釈稿（上）

鹿 野 し の ぶ

【本稿の意義】

『源経氏歌集』は、東京大学史料編纂所蔵（所蔵者番号 貴11・1）室町時代初期写本のための孤本である。三九八首を収め、自撰家集とされる。作者の源経氏は南北朝後期の武将細川経氏のことであり、先行研究では系図の注により経氏は初名を業氏といい、勅撰集の『新拾遺集』に業氏として一首、『新後拾遺集』に経氏として三首と見えることから『新後拾遺集』が成立した至徳元年（一三八四）の頃に業氏は経氏と改名したかとされてきた。

ところが、『勅撰作者部類』では業氏と経氏は別項目に立てられるなど「経氏」を業氏と見てよいのか疑問が残る。稿者は「『源経氏歌集』考」（日本大学国文学会『語文』百七十八輯 令和七年一月）において系図、史料などを再調査し、分析した結果、「経氏」とは業氏息の満経の初名であると結論づけた。

これにより歌の解釈にも影響があると考え、歌集の、特に四季部に注釈を附したものが本稿である。四季部を取り上げる理由は以下の通りである。四季部は季節・時間の推移に沿って詠まれるため、歌人の基礎的な詠歌の

力量を知るに適している。また本歌集の最大の特徴は二条為遠・二条良基など当代歌壇の重鎮たちによる合点が付されている点である。その評価の検討を行うにも前述の理由によりふさわしい。加えて、応永二〇年頃に耕雲が將軍足利義持の命を受け、「書入注」も加えている。この書入注が四季部に見られる点（注釈稿（下）冬歌二一八番）が挙げられる。さらに四季部の詞書には細川家を始めとする「経氏」の交流が知られる人物の名が見られる（秋歌一二六番「右馬頭入道道源家」、一六六番「右京大夫」、冬歌二二四番「武蔵守」・「御子左大納言」など当時の歌壇を考える上で重要な情報が記される点も挙げられる。

当時の歌壇の一端を知る注目すべき歌集の和歌について、詳細に分析することにより「経氏」の和歌の実力と当代きつての歌人の評価について明確することができると考える。

【凡例】

- 1、本稿は東京大学史料編纂所蔵『源経氏歌集』（番号 貴11・1）の四季部歌の注釈である。四季部の歌数は二二七首あるため、上（凡例・春歌）・中（夏歌・秋歌）・下（秋歌・冬歌）の三部に分けて掲載の許可を得た。
- 2、【本文】には1、を底本とし翻刻し漢字仮名表記を改め、底本の表記を右傍に記し、補った送り仮名は（ ）に入れて、整定本文を示した。なお、底本に改訂本文があるときは「」に入れて示し、語釈で補説を行った。

- 3、本歌集の特徴として、当代歌人の重鎮たちによる合点が付されていることが挙げられる。歌集巻末に見られる注記を示すと次のようになる。※は稿者による注記であり、【合点】の項目にはへゝ内の表記で示した。なお、最末尾に「御点外御自撰」とあり、合点がないものは、「経氏」自身が選んだ歌である。

- 墨 故宗匠為遠 ※二条為遠〈為遠〉 朱 今宗匠為重 ※二条為重〈為重〉
- 左朱 摂政殿二条 ※二条良基〈良基〉 左 四辻殿于時大納言 ※四辻善成〈善成〉
- 星 花町中書王 ※廉仁王 〈花町〉
- 4、【詞書】には歌題や詞書に記される人物などについて、注を付した。『千首』題とは『中院千首』題を指す。『堀河百首』『永久百首』の題は歌学用語として「堀河百首題」「永久百首題」と表記した。「藤川百首題」に見られる場合にはその題意を記す三条西実枝著『初学一葉』（『日本歌学大系』六 風間書房）を適宜引用した。なお、歌題の読み方については、『明題部類抄』（新典社）によった。
- 5、【口語訳】には和歌表現に忠実になるよう心がけ口語訳を附した。
- 6、【語釈】には必要に応じて和歌に用いられている言葉について語義を附し、和歌修辭に言及した。
- 7、【参考】には本歌や想定される参考歌、類歌、本説としての物語などを示した。
- 8、【補説】には和歌の解釈や詠歌背景などについて必要に応じて、解説を附した。
- 9、解釈するにあたって、特に以下の先行研究の学恩を多く受けた。各注釈に逐一記していないが、稿者は本稿を基に経氏の歌風の特徴について論じる用意があり、その際に改めて謝辞を示したい。岩波書店・新大系、明治書院・和歌文学大系、小学館・新全集、岩佐美代子『玉葉和歌集全注釈』同『風雅和歌集全注釈』（笠間書院）、片桐洋一『古今和歌集全注釈 上中下』（講談社学術文庫）、久保田淳『藤原定家全歌集 上下』（ちくま学芸文庫）、小田勝『実例詳解古典文法総覧』（和泉書院）
- 10、なお、紙幅の都合で参考歌の詞書や『初学一葉』の一部を略した場合がある。

【注釈】

春歌

年中立春

一 をしめどもとまらぬもの之行（く）年としにいかでか春の立ち返帰るらむ

【合点】 善成

【詞書】「年中としのうちの立春」。

【口語訳】いくら惜しんでも止まらずに行く年にどうして春が引き返してくるのだろうか。

【語釈】●いかでか―副詞「いかで」に疑問の係助詞「か」で「どうしてゝか」。●春の立ち返るらむ―「立ち返る」は一年の内にもう一度春が引き返してくる、の意。「らむ」は現在推量の助動詞で係助詞「か」を受け、係り結びで連体形。

【参考】「をしめどもとどまらなくに春霞かへる道にしたちぬとおもへば」（『古今集』春下・一三〇・「春を惜しみてよめる」・在原元方）

【補説】元方歌のように、行く春が留まらず惜しまれるとされるが、年内に再び春が立ち返ってくるのはどうしてだろうとする。

立春

二 神代よりいくとせ春の立たちぬ「とか」今日は磐戸いはとのあけがたの空

【合点】 為重

【詞書】「春立つ」。堀河百首題。

【口語訳】神代からどれほどの年月が流れ春がたったというわけなのか。今日はあの天照大神が天磐戸を開けて出られた時のような夜明け方の空よ。

【語釈】●立ちぬとか―底本「らん」を見せ消し「とか」とする。「立ちぬとか」は不確実な想像・伝聞を表す。●磐戸―磐でできたとびら。●あけがたの空―「あけ」に「(磐戸を)開け」と「(夜が)明け」とを掛ける。

【参考】「春たつとけふはいはとの神代よりあくればかすむ天のかぐ山」(建保四年『内裏百番歌合』春・四番右持・八・藤原経通)

【補説】天照大神が天磐戸に隠れて世の中が常闇になった時、八百万の神々が神楽をそうして大御神の出現を得た神話による。浅田徹氏「神話の立春」(『徳江元正先生退職記念 鎌倉室町文学論纂』三弥井書店 平成一四年) 参照。

三 三輪の山あくる尾上^{おのへ}の霞^{かす}まずは今日^{けふ}さへ春^{はる}をいかに待ち^まみむ

【合点】善成

【詞書】二番歌「立春」題を受ける。

【口語訳】三輪山で夜が明けて山頂が霞むことがなかったならば、(立春という)今日さえも春をどんなにか待ちかねることだろう。

【語釈】●三輪の山―大和国の歌枕。現在の奈良県桜井市東北部。『古今集』「我が庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひきませ杉立てる門」(九八二)と恋しい思いで訪ねてくる場所の意を踏まえて、春の訪れを待つとする。

●尾上―山の頂。●霞まずは―打消の助動詞「ず」の未然形に接続助詞の「は」で順接の仮定条件を表す。●さ

へ―類推の副助詞。さえも。

【参考】「三輪の山いかにまち見む年ふともたづぬる人もあらじと思へば」〔古今集〕恋五・七八〇・伊勢

早春浦

四 志賀の浦の波は氷もとけぬ間にまづ立ちそむる朝霞かな

【合点】 為遠

【詞書】「早春の浦」。『千首』題。

【口語訳】 志賀の浦の波は氷も溶けない間にまず初めに朝霞が立ち始めるのだな。

【語釈】 ●志賀の浦―近江国の歌枕。現在の滋賀県大津市、琵琶湖西南付近。 ●氷もとけぬ間に―題の「早春」を表す。 ●立ちそむる―「（波が）立ち」と「（朝霞が）立ち」とを掛ける。

【参考】「さ夜更くるままに汀やこほるらん遠ざかりゆく志賀の浦波」〔後拾遺集〕冬・四一九・快寛法師

子日

五 万代とかぎりやはせん子の日してつきせぬ春を祝ふ心は

【合点】 花町

【詞書】「子の日」。堀河百首題。

【口語訳】 万代にも渡りますようにと限るだろうか、いや限らないよ。この子の日の松を引きながら尽きることのない春を祝う心は。

【語釈】 ●万代―いつまでも長く続く世。 ●かぎりやはせん―「やは」は反語の意。「ん（む）」は推量の助動詞連体形。係り結びで二句切れ。

【参考】「春日野に若菜つみつつよろづ世を祝ふ心は神ぞしるらむ」（『古今集』賀・三五七・素性法師）

【補説】「万代」ということでさえも限りを表現してしまう、尽きることのないこの世の春を歌った機知に富んだ表現。

春の歌の中に

六 ふるほどはこほりし雲も山の端^葉の雪より上^{うへ}に霞^{かす}みそめつつ、

【合点】 为重

【詞書】「春の歌を詠みました中に」。

【口語訳】雪が降っている間は凍っていた雲も（春となり）山の端に積もった雪よりも上に霞み始めている。

【語釈】 ●ふるほどは―「（雪が）降る」に「（時が）経る」を響かせるか。

【参考】「今朝もなほ山は雪氣の空ながら雲も霞みて春はきにけり」（『壬二集』八〇一）

山霞

七 待ち^まえたる都^との空^{そら}はなほ冴^さえて遠^とき山^{やま}辺^べにかすむ春かな

【合点】 善成

【詞書】「山霞」。『千首』題。『為重朝臣詠草』（七〇）康暦二年四月二〇日歌会で出題。

【口語訳】待ち望んでいる都の空は変わらずに冴えて、遠い山辺に霞んでいる春だな。

【語釈】●待ち得たる―春の到来を待ち望む。『源氏物語』（宿木）に「優曇華の花待ち得たる心地して」と見える。

●なほ冴えて―依然として冷たい空気が漂っている。

【参考】「春きても都の方は空晴れて山の端ばかり立つ霞みかな」（『洞院撰政百首』春・七六・藤原光俊）

八 いまはまづ春のみどりもよそにのみ見えてぞ霞む葛城の山

【合点】善成

【詞書】七番歌「山霞」題を受ける。

【口語訳】今はともかく春の緑も他所にばかり見えて霞んでいる、葛城の山は。

【語釈】●いまはまづ―「まづ」は「先づ」で何はともあれ、とりあえずの意。『新編国歌大観』では「いまはまづ」と濁音で読んでいる。あるいは「まつ」と清音で読み、「待つ」と「松」（「緑」の縁）と詠んだか。その場合は「今はまだ待っている、松のような春のみどり」と解せるか。●見えてぞ霞む―係り結び。●葛城の山―底本「からきの山」とあり、「か」と「ら」の右傍に「つ」と補筆される。「葛城山」は大和国の歌枕。現在の奈良県と大阪府の県境に連なる山系。

【参考】「葛城や高間の山の桜花雲井のよそに見てや過ぎなん」（『千載集』春上・五六・藤原顕輔）

九 都よりへだつる中と霞めるや遠山鳥の尾上なるらむ

【合点】為遠

【詞書】七番歌「山霞」題を受ける。

【口語訳】都から遠ざかっているので霞んでいるのか、遠くの山の山鳥がいる尾上であるだろう。

【語釈】●へだつる中——「中」は二つの物の間。都と遠山をいうが、山鳥の雌雄が離れて寝ることから間柄の意味、「仲」も響かせ、恋の要素を含ませている。●霞めるや——「や」は疑問。●遠山鳥——山鳥の異名。「遠くの山」の意を掛ける。●尾上なるらむ——「尾上」は山の頂。峰。「(山鳥の)尾」を掛ける。「なる」は断定の意。「らむ」は現在推量の助動詞。

【参考】「暮れかかる遠山鳥の尾上よりまだきへだててたつ霞かな」(『頓阿句題百首』二・「遥峰帯晚霞」・良守)。

朝霞

一〇 やがてまた霞^又みにけりなほのぼ^ぐのと見えて明^あけぬる杉のむら立ち

【合点】為遠

【詞書】「朝霞」。

【口語訳】すぐにまた霞んでしまったのだなあ。夜が明けて、朝霞の中からぼうっと見えてきた群れ立つ杉の緑は。

【語釈】●霞みにけりな——「霞む」の連用形。その状態が発生した意の助動詞「ぬ」の連用形に気づきの意の助動詞「けり」が接続した表現。「な」は詠嘆の終助詞。●ほのぼのと——夜がほんのりと幽かに明けてゆく様子。朝霞の中にはつきりとは見えないが杉が翳んで見える様子を表現。●あけぬる——「明く」は夜が明けて、空が明るくなる様子。●杉のむら立ち——群生する杉。

【参考】「春の夜のあけのそほぶねほのぼのといく山本を霞みきぬらん」（『続古今集』春上・四八・「元久の詩歌合に、水郷春望といふことを」・藤原良平）

山霞

一一 春を経てにぎはふ民の竈門山^{かまどやま}かすむや絶えぬ煙^たなるらむ

【合点】 善成

【詞書】 七番歌参照。

【口語訳】 幾年もの春を過ごして賑わう民の竈の名を持つ竈門山よ。霞んでいるのは絶えることのない民が竈で煮炊きする煙なのだなあ。

【語釈】 ●竈門山―筑前国の歌枕。現在の福岡県太宰府市・筑紫野市・粕屋郡にまたがる宝満山。「竈」を掛ける。●絶えぬ煙―「煙」は「竈（門山）」の縁。民の生計が豊かになったことを示す。

【参考】「高き屋にのぼりてみれば煙立つ民の竈はにぎはひにけり」（『新古今集』賀歌・七〇七・「貢物許されて、国富めるを御覧じて」・仁徳天皇）

【補説】 【参考】に挙げた仁徳天皇歌を踏まえ、当代主君の予祝とする。

名所歌よみ侍るとて、志賀浦春を

一二 こほりゐし汀^{みぎは}〔の〕浪も立ちそめてをちかた霞^{かす}む志賀^{しが}の浦風^{かぜ}

【合点】 为重

【詞書】「志賀浦の春」。「名所歌」の詠歌年次は未詳。

【口語訳】凍つてとどまっていた汀の波も立ち始めて遠方はすっかり霞んでいる、志賀の浦で風が吹いたので。

【語釈】●汀の浪も―底本「みきは」の「は」は判読不明文字の上に重ね書きされ、「の」は右傍に補筆される。

●志賀―四番歌参照。

【参考】「こほりゐし志賀の唐崎うちとけてさざ波よする春風ぞ吹く」（『詞花集』春・一・大江匡房）

湖上朝霞

一三 志賀の浦やなぎたる朝に漕ぐ舟も霞の浪をわけまよひつつ、

【合点】為遠・善成・耕雲

【詞書】「湖上の朝霞」。藤川百首題にも見える。題意は『初学一葉』に「湖上とはみづうみをいふなり。（略）みづうみなれば、しほならぬ海の心をいひ（略）、志賀の浦。（略）皆湖辺の名所なれば思ひ寄すべし。湖上の上の字は虚字にて心なし。（略）扱て此の類題の心は、湖辺はさらでものどかなるに、春来りて霞みわたり、浦漕ぐ舟のけしきまでしづかなる心、先づ此の題の大意なるべし、（略）春の霞ののどかに立ちわたる心を詠ぜんも又ひとつ趣向なるべし」とある。

【口語訳】志賀の浦では、風が止んで晴れ渡っている朝に漕ぐ船も霞が波のように立っているのですその間を分け進みさまよっているのだな。

【語釈】●志賀の浦や―四番歌参照。「や」は地名を提示する間投助詞。●なぎたる―風がなく波も穏やかな様子。

【参考】「須磨の浦のなぎたる朝はめもはるに霞にまがふ天の釣り舟」（『新古今集』雑中・一五九八・藤原孝善）

河霞

一四 氷（り）ぬし岩間の浪もたつた川かすみの下を水くぐるなり

【合点】 為重

【詞書】 「河霞」。『千首』題。

【口語訳】 凍ってとどまっていた岩間の波も春が来て溶けて立っている竜田川では霞の下を水が潜っているのだな。

【語釈】 ●たつた川―「龍田川」は大和国の歌枕。現在の奈良県生駒郡斑鳩町・三郷町の一帯。「（浪も）立つ」を掛ける。●水くぐる―「霞の下を」とあるので「潜る」と解した。『顕注密勘』には、「水くぐる」とは、紅の木の葉の下を水のくぐりてなると云歟。潜字をくぐるとよめり」とある。

【参考】（本歌）「ちはやぶる神世もきかず竜田河唐紅に水くくるとは」（『古今集』秋下・二九四・在原業平）

【補説】 本歌の業平歌で詠まれた括染めした唐紅色の秋の世界を霞や浪といった白色の春の世界として詠んだ。

雪中鶯

一五 打ち霧らしつもりもやらで降る雪を春のしるべと鶯ぞ鳴（く）

【合点】 為遠

【詞書】 「雪の中の鶯」。『千首』題。

【口語訳】 視界をさえぎって雪が降り続いているが積もる様子ではなく降る雪を春の訪れる印だとして鶯が鳴いている。

【語釈】 ●打ち霧らし―「霧らす」は霧で曇らせるの意。視界をさえぎる様子。ここでは雪がしきりに降ってはいるものの春の淡雪であるため積もらない景色を想起している。【参考】 歌参照。

【参考】 「うちきらし雪はふりつつしかすがにわが家のそのに鶯ぞなく」（大伴家持、『万葉集』巻八・一四四一、『拾遺集』春・一一）

鶯

一六 住み捨てぬ古巢もしるく山里の垣穂の竹に鶯ぞ鳴く

【合点】 為重

【詞書】 「鶯」。堀河百首題。

【口語訳】 住み捨てない古巢もはつきり分かるように山里の高い垣穂の竹に鶯が鳴いている。

【語釈】 ●住み捨てぬ―「住み捨つ」は住んでいた巢を離れてそのまましている状態。「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形。●古巢―古びているが住み慣れた巢。●しるく―「著し」は、はつきりしているの意。

【参考】 「鶯の今朝鳴く時ぞ山がつかきほも春に逢ふこちする」（『玉葉集』春上・四八・「宝治百首歌たてまつりけるに朝鶯」・後鳥羽院下野）

谷鶯

一七 鶯のなげども牙ゆる谷風に涙のつらいかでとくらむ

【合点】 善成

【詞書】「谷の鶯」。

【口語訳】鶯が鳴いても冷え切った谷風に涙のつらははどうして溶けるのだろうか。

【語釈】●なけども―鶯が「鳴く」に【参考】に挙げた本歌で鶯を擬人化して捉えた「泣く」を響かせ、下句で「涙」と表現する。

【参考】（本歌）「雪の内に春は来にけり鶯のこほれる涙今やとくらむ」（『古今集』春上・四・読人しらず）、「鶯の涙のつららうちとけてふる巢ながらや春を知るらむ」（『新古今集』春上・三一・惟明親王）。

羈中聞鶯

一八 行（き）暮るる山下道のすゑみればなびくかすみに鶯ぞ鳴く

【合点】善成

【詞書】「羈中に鶯を聞く」。藤川百首題にも見える。題意は『初学一葉』に「羈中は羈旅ともいひて遠き旅なり。（略）鶯は春のはじめより鳴くものなれば、先づのどかなる心を詠すべし。（略）此の題には都の恋しさを鶯のこゑにおもひ、分け行く春の野山に聞初めて珍しき心など読むべし。」とある。

【口語訳】行く途中で日が暮れる山の下の道では、その先の方はまだ暮れておらず霞がなびいているのが見え、鶯が鳴いている。

【語釈】●行き暮るる―旅の途中で日が暮れる。●すゑ―その先。●鶯ぞ鳴く―係助詞「ぞ」を受け「鳴く」は連体形で係り結び。

【参考】「行きくるる山路のすゑのやどなれや入相の鐘の音ぞ聞ゆる」（『永享百首』旅・九四一・性脩）

名所残雪

一九 比良〔の〕海や氷のひまの山^{やま}かげにみなそ^{(ママ)ふか}深く雪ぞ^{のこ}残れる

【合点】 良基

【詞書】 「名所の残雪」。『経氏集』の他未見。

【口語訳】 比良の海では氷の隙間に映る山の姿を見ると、水底に深く雪が残っている。

【語釈】 ●比良の海―底本「比良の」の「の」を「野」と書き始めた後、少々擦って「の」と記している。「比良の海」は近江国の歌枕。現在の滋賀県大津市にある琵琶湖。「や」は地名の提示。●みなそ深く―「こほり川みなそこふかく」とちてけり早く流れし音も聞こえず」（『夫木抄』雑六・一一一六九・禰式部）などの用例から「みなそこふかく」として解釈した。

【参考】 「比良の海は高嶺のかげやうつるらん跡なき波に降れる白雪」（『草庵集』七九七・「湖雪」）

若菜

二〇 春日野の雪まの若菜^{わか菜}待（ち）わびてこほる沢辺にねぜりをぞ摘む

【合点】 為遠・耕雲

【詞書】 「若菜」。堀河百首題。

【口語訳】 春日野の積もった雪の間から生える若菜を待ちわびて、凍る沢辺に根芹を摘むよ。

【語釈】 ●春日野―大和国の歌枕。現在の奈良市春日野町あたり。●ねぜりをぞ摘む―「ねぜり」は根の部分を食用とする芹。「ぞ」「摘む」は係り結び。

【参考】「春日野の雪げの沢に袖たれて君がためにと小芹をぞ摘む」（『堀河百首』春・七一・「若菜」・藤原仲実）

田辺若菜

二一 まかすべき田中の井戸のこほる間にまづ降りたちてねぜりをぞ摘む

【合点】善成

【詞書】「田の辺若菜」。ほとり藤川百首題にも見える。題意は『初学一葉』に「田畔若菜」として、「畔の字、くろと読む字なれど、こゝにては辺の字の心なるべし。（略）若菜は春の始めに摘むものなれば、春の浅き事を云ふべし。沢辺に読めるは多くの若菜とて芹の事なり。（略）」とある。

【口語訳】水を引く田中の井戸の凍るその間に、まず田に降りたつて根芹を摘むよ。

【語釈】●まかす―「引す」と表記し、水を引き入れるの意。●ねぜりをぞ摘む―二〇番歌参照。

【参考】「ねぜり摘む春の沢田に降り立ちて衣の裾の濡れぬ日ぞなき」（『金葉集』初度本・春・三一、『好忠集』二〇・「正中中」）

春雪

二二 佐保姫の霞の衣白妙に雪吹（き）乱す春の山風さほひめ かすみ ころも みだ かぜ

【合点】為重

【詞書】「春の雪」。

【口語訳】佐保姫がまどっている霞の衣がさらに真っ白になったのは雪を吹き乱す春の山風が吹いたためである。

【語釈】 ●佐保姫―春を司る女神。 ●雪吹き乱す―先行例は少なく、管見では「先だちて過行くとも見えぬま
で雪吹きみだす野べの夕風」(『持明院殿御歌合 康永元年十一月四日』廿四番 左勝・四七・花園院)という用例を見る。
【参考】「佐保姫の衣はる風なほさえて霞の袖にあは雪ぞ降る」(『続後撰集』春上・二〇・「早春霞といへる心を」・嘉
陽門院越前)

梅風

二三 なほ^{をさ}冴^{よも}ゆる四方の木ずる^し嵐にもひとり春^{むめ}知る梅が香^くぞする

【合点】 花町

【詞書】「梅の風」。『千首』題。

【口語訳】 あちらこちらの梢には依然として冷たく吹く嵐に対しても、まるで私一人だけが春の訪れを知っているといわんばかりに梅の香りがする。

【語釈】 ●なほ冴ゆる―春になってもまだ冬の名残で冷たい風が依然として吹いている様子を表す。「猶さゆる嵐は雪を吹きまぜて夕ぐれさむき春雨の空」(『玉葉集』春上・三三・永福門院)。 ●ひとり春知る―梅の花だけが春の到来を知っているということ。「白雪の降りて積れる谷かげにひとり春しる鶯の声」(『隣女集』九三三)。 ●梅が香ぞする―春がやってきたことを知るすべとして梅の香りが漂っていることをいう。

【参考】「猶さゆる雪につつめる声ながら梅がえわきて鶯ぞ鳴く」(『後鳥羽院御集』六二七)

二四 梅が香をさそひもはてず木の本に誰がため残す嵐なるらむ

【合点】 良基

【詞書】 二三番歌「梅風」題を受ける。

【口語訳】 梅の香りをすっかり運んでしまわない。いったい誰のために嵐は木の根元に残すのだろう。

【語釈】 ●さそひもはてず―「さそふ」は持ち去る。「はつ」は補助動詞で「すっかりくする」の意。「ず」は打消の助動詞の終止形。二句切れ。嵐が梅の香をすっかり運ばない、の意。●木の本―木の根もと。

【参考】 「風だにもさそひもはてぬ一枝の花をばいかがをりてかへらむ」（『風雅集』春下・二六〇・「花の一枝散り残れるを、人のそれをりて、といひければよめる」・道因法師）。

山路梅

二五 つま木とるしづがかへさの袖までも梅が香ふかし山の下道

【合点】 為重

【詞書】 「山路の梅」。「山路梅花」という四文字題で藤川百首題にも見える。その題意は『初学一葉』に「山路は自ら山路を行く躰なり。山類の言葉をまづ思ひよすべし。梅は取りわき匂を賞する物なれば、幾度も其の心を詠ずべし。（略）」とある。

【口語訳】 山住の人が小枝を拾う、その帰り道の袖までも梅の香りが深く香っている、山の花陰にある道では。

【語釈】 ●つま木―薪をするために使う小枝。●しづがかへさ―「しづ」は木こりなど山の仕事で生計を立てている人。「かへさ」は帰り道。ここでは薪を拾って帰る、その帰り道。●山の下道―「下道」は物の影になつて

通じている道のこと。

【参考】「色も香もやすらふ袖にうつりけり山かげてれる梅の下みち」(『伏見院御集』一七七八・「路梅」)

庭梅

二六 梅が香をしる人住まぬこの宿とほかにやさそふ庭の春風

【合点】 善成

【詞書】「庭の梅」。『千首』題。

【口語訳】梅の香りの素晴らしさを知っている人は住んでいない、この宿だよと他の人を誘う庭の春風よ。

【語釈】●しる人住まぬ―【参考】友則歌を踏まえた表現。【補説】参照。●庭の春風―「あかなくのほひをちらす梅がえの花にいとほぬ庭の春風」(『玉葉集』春上・七八・「庭梅といふことを」・亀山院)

【参考】「君ならで誰にか見せむ梅花色をもかをもしる人ぞしる」(『古今集』春上・三八・「梅の花を折りて人におくりける」・紀友則)

【補説】梅花の素晴らしさをよくよく理解している人は少なく、あなた以外に風流な人はいないとする友則歌(参考・片桐注)を踏まえ、「梅が香をしる人住まぬ」と詠んだ。

二七 よそにとは風もさそはず吹くたびに小簾のひまもる軒の梅が香

【合点】 為遠

【詞書】二六番歌「庭梅」題を受ける。

【口語訳】他の場所へとは風も誘わない。吹くたびに小簾の隙間から漏れてくる軒近くに植えられている梅の香りは。

【語釈】●風もさそはず―「ず」は打消の助動詞の終止形。二句切れ。●小簾のひまもる―「小簾」は御簾のこと。●軒―軒端近くの、の意で題の「庭」を表す。

【参考】「雨はるる風はをりをり吹きいれてこすのまにほふ軒の梅がえ」（『風雅集』春上・八八・永福門院内侍）

紅梅

二八 袖ふれてうつしやせまし くれなゐ 紅のこぞめの梅の色もにほひも

【合点】善成

【詞書】「紅梅」。永久百首題。

【口語訳】袖を触れて、移してしまおうかしら。紅に色濃く染めた梅の色も香りも。

【語釈】●うつせやせまし―「や」は疑問の意の係助詞。「まし」は行動を起こすか思い迷う気持ちを表す。係り結びで連体形。二句切れ。●こぞめ―色濃く染めること。また、その染めたもの。濃染め。「けふも又人もとほでや紅のこぞめの梅の花の盛りを」（『続古今集』春上・六〇・宗尊親王）。

【参考】「紅のこぞめの梅の花のえはさくもさかぬも色に出でつつ」（『新後拾遺集』春上・四八・読人しらず）

春雨

二九 春雨の空をかすむとながむればふる音しもぞのどけかりける

【合点】 為重

【詞書】「春雨」。堀河百首題。『為重朝臣詠草』（二〇）康暦二年正月十七日「当座三十首」出題。

【口語訳】春雨の降る空を霞んでいるなあと物思いにふけり眺めていると、その降る音はかえって穏やかなものに聞こえるよ。

【語釈】●ながむ―「眺（め）」に「長（雨）」を響かせるか。●ふる―「降る」に「経る」を響かせるか。●音しもぞ―「もぞ」は危惧の意となるが、「しもぞ」となるとその意は表さない。ここでは雨の音がむしろのんびりとしたものとなる、の意。

【参考】「春雨のさはにふるごとおともなく人にしられてぬるる袖かな」（『玉葉集』恋一・一二六八・小野小町）

三〇 春雨のふるとなき世を思ひわび心づからにぬらす袖かな

【合点】 為重

【詞書】二九番歌「春雨」題を受ける。

【口語訳】春雨が降ると私の死後を思い悲しみ、自ら袖を濡らすことですよ。

【語釈】●ふる―「（春雨が）降る」に「（年月が）経る」を響かせ、年月が経ち私が死んだら、と二句目に掛かるか。●心づからに―自分の心から、自分の意志で、という意。「春風は花のあたりをよきて吹け心づからやうつろふと見む」（『古今集』春下・八五・藤原好風）。

【参考】「春雨に涙ふるまで惜しむらんはかなき世とて散りゆく花を」（『露色随詠集』六一八）

柳

三一 いとどしく木の芽はる風日数へてなびきぞまさる青柳の糸

【合点】 為遠・花町

【詞書】「柳」。堀河百首題。

【口語訳】 いっそう甚だしく木の芽を膨らませる春風が吹く日数が重なり、さらになびいている、青柳の糸は。

【語釈】 ●木の芽はる風―「はる」は「木の芽を」張る」と「春（風）」とを掛ける。「帰る雁雲ちにまどふ声すなり霞ふきとけこのめはる風」（『後撰集』春上・六〇）。 ●なびきぞまさる―係り結び。青柳の糸は春風に吹かれていっそうなびいている、の意。

【参考】「春風のかすみ吹きとく絶え間より乱れてなびく青柳の糸」（『新古今集』春上・七三・殷富門院大輔）

三二 青柳の縹の糸のなびかずはのどけき風のなにに吹かまし

【合点】 為重

【詞書】 三一番歌「柳」題を受ける。

【口語訳】 青柳の縹色の糸がもしなびかないならば、穏やかな風は何に吹くのだろう、いや何にも吹くものがない。

【語釈】 ●縹の糸―縹色の糸。青柳をたとえていう。『催馬楽』（浅緑）に「浅緑恋縹染めかけたりとも見るまで

に玉光る下光る新京朱雀のしだり柳」とある。●なびかずは―「ず」は打消の助動詞の連用形。「は」は係助詞。打消の仮定条件となり「なびかなかったならば」の意。

【参考】「青柳の花田の糸をよりあはせてたえずも鳴くか鶯の声」(『拾遺集』春・三四・凡河内躬恒)、「雨はれて露の玉ぬく青柳のはなだの糸に春風ぞ吹く」(『新後拾遺集』春上・五九・「延文百首歌」に・足利尊氏)

柳露

三三 佐保姫さほひめのこれやかざしの玉かづら朝露かかる春の青柳

【合点】 為重

【詞書】「柳の露」。『千首』題。

【口語訳】佐保姫のこれが挿頭の玉鬘なのだなあ。朝露がかかる春の青柳を見てそのように思います。

【語釈】●これやかざしの―『為尹千首』に「初瀬女のこれやかざしのをりのこしおよぶばかりは見えぬ花かな」(春・一四三)と見える。

【参考】「あさみどり春のすがたにさほひめはしだり柳のかづらしてけり」(『堀河百首』一一九・藤原仲実)

水辺岸柳

三四 龍田河あさせの岸きしに寄る波なみも深きみどりや青柳の影ふか

【合点】 善成

【詞書】「水辺の岸の柳」。『経氏集』の他、未見。

【口語訳】 龍田川は浅瀬の岸に寄せる波も深き緑になっているよ、青柳を射す光が反射して。

【語釈】 ● 龍田河―「龍田」は一四番歌参照。「龍（田）」に「立つ」を響かせ、「波」の縁語。● あさせの岸―「岸」「寄る」「波」は縁語。上句の「浅瀬」と下句の「深き（みどり）」とが対になる。

【参考】「夏衣たつた川原の柳蔭すずみに来つつならす頃かな」（『後拾遺集』夏・二二〇・曾根好忠）、「春風のわたればいとど乱れけり龍田河原の青柳のかげ」（『政範集』一〇二・「河柳」）。

帰雁

三五 帰る雁^{かり}いかでか雪のふるさとに都^{みやこ}の春^{おも}を思ひかふらむ

【合点】 善成・耕雲

【詞書】「帰雁」。堀河百首題。『為重朝臣詠草』（四二）「康暦二年三月十八日道場月次会、同年卯月・当座五十首監相出題」。

【口語訳】 帰る雁はどのようにして雪の降る故郷で都の春を気持ちの切り替えをするのだろうか。

【語釈】 ● 雪のふるさと―「ふる」に「降る」と「故（郷）」とを掛ける。● 思ひかふ―思いを改める。ここでは都から雪の降る故郷へ移り、都で過ごした思い出を名残惜しく思うことなく、気持ちを改めるのだろうかと思ねる。

【参考】「逢ふことをたのむの雁のいかなれば思ひかへりて雲がくるらん」（『清輔集』二七九・「契後隠恋」）

三六 春の雁秋来し旅もほどなきに又たちかへる音をや鳴（く）らむ

【合点】 為重

【詞書】 三五番歌「帰雁」題を受ける。

【口語訳】 春の帰雁が秋にやって来た旅からいく程も立たぬうちにまた帰ってゆく、その鳴き声を聞くのだろうか。

【語釈】 ●秋来し旅―雁が秋になって北方から最初にやってきた、その旅。●音をや鳴くらむ―「音」は雁の鳴き声。「や」は疑問の係助詞。「らむ」は推量の助動詞の連体形。

【参考】 「かへる雁秋こし数は知らねども寢覚めの空に声ぞすくなき」〔風雅集〕春中・一三五・藤原家隆

三七 跡したふ友とだに知れ春の雁連れてこし路の数ならずとも

【合点】 為遠・為重・善成・耕雲

【詞書】 三五番歌からの「帰雁」題を受ける。

【口語訳】 せめて跡を慕う友とだけでも知っておいておくれ。春の雁は、秋に連れて来たその数に足らなくても。

【語釈】 ●跡したふ―先に行く者の後を慕って追う。亡き人の跡を慕うという哀傷歌に用例を見る。●友とだに知れ―「知れ」は「知る」の命令形。二句切れ。●連れてこし路―「こし路」に「来し路」と「越路」とを掛ける。【参考】 古今歌の左注「この歌は、ある人、男女もろともに人の国へまかりけり、男まかりいたりてすなはち身まかりにければ、女一人京へ帰りける道に帰る雁の鳴きけるを聞きてよめるとなむいふ」とあることを踏まえ、秋に連れ立ってやってきた雁の中にはこの土地で亡くなったものもいるだろうから、来た時の数には足らず

悲しく鳴いているという意を込めている。

【参考】「北へ行く雁ぞなくなる連れてこし数は足らでぞかへるべらなる」（『古今集』 羈旅・四二二・読人しらず）

三八 かへる雁思ひ連ぬること問はむ行（く）方もなき身をいかにせん

【合点】 善成

【詞書】 三五番歌からの「帰雁」題を受ける。

【口語訳】 帰る雁が連なって飛びながら思い連ねていることを尋ねてみたい。行き着く先もない我が身をどのようしたらよいものなのか。

【語釈】 ● 思ひつらぬる―さまざまなことを次々と考える。【参考】 躬恒歌を踏まえた表現でつらい憂きことを思い連ねている。「つらぬる」に「（雁が）連ぬる」を掛ける。● こと問はむ―意志の助動詞「む」の終止形。三句切れ。

【参考】 「うきことを思ひつらねて雁がねの鳴きこそわたれ秋のよなよな」（『古今集』 秋上・二二三・凡河内躬恒）

蕨

三九 冬枯れの野辺のおどろの下蕨もえていつより春を待ちけむ

【合点】 花町

【詞書】 「蕨」。堀河百首題として「早蕨」がある。

【口語訳】 冬枯れの野辺の乱れ茂った下蕨がもえ出ていつから春を待っていたのだろうか。

【語釈】 ●おどろの下蕨―「下蕨」は春になって、冬枯れの草の中に小さく生え出た蕨のこと。それが乱れ生い茂っている様子。 ●春を待ちけむ―「けむ」は過去推量の助動詞。

【参考】「深山木のかげのの下の下蕨もえいづれども知る人もなし」（『堀河百首』春・「早蕨」・一三九・藤原基俊）

遊糸

四〇 何にしもかかるとはなきいとゆふのあるかなきかのわが身なりけり

【合点】 善成

【詞書】「遊糸」。永久百首題。

【口語訳】 何かに限ってかかるというわけではない糸遊のようないるのかいないのか分からないような我が身なのですよ。

【語釈】 ●何にしも―「しも」は「なき」という否定語をとまって、その焦点が「何かに限るというわけではない」ことを示す。 ●かかる―糸の縁語。 ●いとゆふ―かげろう。 ●あるかなきか―【参考】歌を踏えた表現。

【参考】「霞はれみどりの空ものどけくてあるかなきかに遊ぶいとゆふ」（『和漢朗詠集』下・雲・四一五）

春月

四一 出で入（る）もいづれ境と山隠す霞をわけて月の行（く）らん

【合点】 善成・耕雲

【詞書】「春の月」。

【口語訳】出たり入ったりするのどこを境として山を隠しているのか。恨めしい霞を分けて春の月が行くのでしよう。

【語釈】●出で入るも―月が出たり、入ったりする。●いづれ境と山隠す―【参考】古今歌で春になって東国から都にやってくる途中、都を隠す霞を恨めしく思うとするその気持ちを踏まえ、春の月が霞によって出で入る山の境を隠されていることに対してもどかしく思うと表現。

【参考】本歌「山かくす春の霞ぞうらめしきいづれ都の境なるらむ」（『古今集』羈旅・四二三・乙）

待花

四二 しばしただ消えせぬ雪を花と見て待つ日も遅き山桜かな

【合点】花町

【詞書】「待つ花」。『千首』題。

【口語訳】少しの間ただ消えることのない雪を花だと思って見て待つ日も遅い山桜なのだ。

【語釈】●待つ日も遅き―【参考】後撰集の贈答歌の返歌を踏まえた表現。【補説】参照。

【参考】「山がくれ消えせぬ雪のわびしきは君まつのはにかかりてぞ降る」（『後撰集』恋六・一〇七二・「心ざし侍る女宮仕へし侍りければ、逢ふこと難くて侍りけるに、雪の降るにつかはしける」・（読人しらず）・「我が恋ひし君があたりをはなれねば降る白雪も空に消ゆらん」、一〇七三・「返し」・読人しらず）

【補説】『後撰集』一〇七三番歌の山の陰で消えずに残っている雪のわびしさと相手を待っているわびしさという恋の要素を取り込み、当該歌では二句目と四句目で花が咲くのを待つとよみ、題の本意を表している。

四三 咲かぬ間はさていつまでぞ花見んといそぎし春ぞなかば過ぎぬる

【合点】 為遠

【詞書】 四二番歌「待花」題を受ける。

【口語訳】 咲かない間はそれにしてもいつまででしょうか。花を見ようと急いだ春は半ばを過ぎてしまつたよ。

【語釈】 ●さて―感動詞。それにしても、まあ。●いつまでぞ―いつまで咲かないのでしょうか。ここで切れ、二句切れ。●花見んと―「ん（む）」は意志の助動詞。

【参考】 「植ゑし時花見むとしも思はぬにさき散る見れば齡老いにけり」(『後撰集』春中・四七・藤原扶幹)

尋花

四四 桜咲く花のところは知らねどもまづわけ入らんみ吉野の山

【合点】 為遠

【詞書】 「尋ぬる花」。『千首』題。『為重朝臣詠草』(四六) 康暦二年三月(十八日) 当座三十首に出題。

【口語訳】 桜が咲くその花の場所は知らないけれど、ともかくまずは分け入ってみよう、み吉野の山へ。

【語釈】 ●み吉野の山―大和国の歌枕。現在の奈良県吉野郡の山。

【参考】 「桜咲く花の所の吉野山深くや春に契りおきけん」(『長綱集』八三)

初花

四五 咲きそむる一もとゆゑになべて世の木ずゑの花ぞいとどつれなき

【合点】 善成

【詞書】 「初花」。はつ『千首』題。

【口語訳】 咲き始めた一本の桜があるが故にすべての世の梢の花は一段とつれないものだ。

【語釈】 ●花ぞいとどつれなき―「いとど」はいよいよ、ますますの意。「つれなき」は係助詞「ぞ」を受けて係り結びとなり連体形。「散過ぐる比しも花にのこる月いとどつれなき在明の空」(『草根集』一一九五・「曉花」)などの用例がある。

【参考】 「咲きそむる宿の桜の一もとよ春のけしきに秋ぞ知らるる」(『風雅集』釈教・二〇七八・永福門院内侍)

四六 一木より家路忘るる心にも花のところぞあまたゆかしき

【合点】 良基

【詞書】 四五番歌「初花」題を受ける。

【口語訳】 一本の木のために家路を忘れる心にも花の咲いている場所は多く心が惹かれる。

【語釈】 ●一木より―「より」はある物の働きかけが起点となっていることを表す。●家路―我が家に帰る路。

●あまたゆかしき―「あまた」は多くの。「ゆかしき」は係助詞「ぞ」を受けて係り結びとなり連体形。

【参考】 「この里に旅寝しぬべし桜花ちりのまがひに家路忘れて」(『古今集』春下・七二・読人しらず)

【補説】 一本の桜の木のために家路は忘れてしまうが、桜が咲いている多くの場所には心が惹かれる、とよんだ。

花の歌の中に

四七 桜狩りさこそ家路の忘れめ宿をもそこ言はぬころかな

【合点】 為重・耕雲

【詞書】 「花の歌を詠んだ中の一首」。

【口語訳】 桜狩りに出かけると家路を忘れるだろう。宿はそこですよ今は言われないな。

【語釈】 ●桜狩り―観桜。花見。●さこそ―副詞「さ」に強めの指示を表す係助詞「こそ」。桜狩に出かけると当然、家路を忘れてしまうだろうという心理を肯定する気持ちを表す。●忘れめ―「忘る」の未然形に自発の意の「る」に推量の意の「む」の已然形。係助詞「こそ」を受けて係り結びとなり、三句切れ。●言はぬころかな―「ころ」は今はくする、の意。

【参考】 四六番歌【参考】 参照。

【補説】 古今集七二番歌の散り敷く桜花のために家路を忘れて旅寝をすることを踏まえて、当該歌は旅寝の宿はそこだと言われないとする。

四八 かつ咲くと見えし木ずゑもわかぬまで花になりぬるみ吉野の山

【合点】 善成

【詞書】 四七番歌「花の歌の中に」の詞書を受けている歌の内容である。

【口語訳】 すぐに咲くと思った梢も分からなくなるほど花が咲き誇っているみ吉野の山だよ。

【語釈】 ●かつ―たちまち。すぐに。●花になりぬる―「なりぬる」はラ行四段動詞「なる」の連用形に状態が

発生する意の助動詞「ぬ」の連体形。桜花が吉野山全体で満開となったことを表現している。●み吉野の山―
四四番歌参照。

【参考】「かへるさは道まよふとも山桜かつ咲く峰をなほやたづねむ」（『新玉津島社歌合』「尋花」・藤原実夏）

遠山花

四九 山^{とを}遠み雲と花とをいくたびかわかで心の行（き）かへるらむ

【合点】 善成

【詞書】「遠山の花」。『為重朝臣詠草』（二三三）康暦二年八月「十六日、禁裏当座三十首、大樹参上、同夜九打程に、別当并万里小路黄門可参之由送状候間、則参上」で出題。

【口語訳】山が遠いので、雲と花とを幾度も行くものの分からなくて心が行き来するのだろう。

【語釈】●山遠み―「遠み」は「遠し」のミ語法。●いくたびか―「幾」と「行く」とを掛ける。「か」は係助詞。●わかで―分別しないで。●心の行きかへるらむ―現在推量の意を表す「らむ」の連体形。係り結び。

【参考】「山高み雲るに見ゆる桜花心の行きてをらぬ日ぞなき」（『古今集』賀・三五八）

【補説】【参考】古今歌で実際には山が高いので雲の辺りにある桜を折りには行けないが心だけが花を折りに行っているということを踏まえ、当該歌では行ってみたものの雲か花か分らずに心が行き来しているとする。

名所花

五〇 咲き続く尾上も八重の花ざかり山の名に立つ雲かとぞみる

【合点】 善成

【詞書】 「名所の花」。

【口語訳】 咲き続く尾上でも八重の花が盛りを迎えている。山の評判と同様に雲が立っているのかと思った。

【語釈】 ●尾上―山の頂。ここでは【参考】に挙げた匡房の歌を念頭に置き、題にある名所として高砂を想起させる。【参考】匡房歌では一般名詞として詠まれているが、ここでの「高砂」は歌題に「名所」とあることから、播磨国の歌枕。現在の兵庫県高砂市の辺り。

【参考】「高砂の尾上の桜咲きにけり外山の霞立たずもあらなん」（『後拾遺集』春上・一二〇・大江匡房）

遠望山花

五一 龍田河花の錦も中絶えて一むらなびく朝霞かな

【合点】 善成

【詞書】 「山花を遠く望む」。藤川百首題にも見える。題意は『初学一葉』に「此の題の大意、遠山の花をみやりたる心なり。何も花の見わきがたき事をよめり。雲にまがひ、霞をかこち、かをりくる風のつてを思へる心など、取りぐにおほかるべし。」とある。

【口語訳】 龍田川は花の錦も途中で絶えて、一群だけ靡いているのは朝霞なのだな。

【語釈】 ●龍田河―「龍田」は一四番歌参照。題の「山」ではなく「河」としたのは【参考】道真歌の「紅葉の

錦」を踏まえているため。●花の錦―美しく咲く花を錦に見立てた。秋の紅葉だけではなく、春の桜も龍田川に散り敷いていることをいう。●中絶えて―霞によって花の錦が途中で切れたように見える。●ひとむら―霞がひとかたまりになっている様子を表す。●朝霞―題の「遠望」を婉曲に表現。「まはして」心を詠んでいる。

【参考】「このたびはぬさもとりあへずたむけ山紅葉の錦神のまにまに」(『古今集』羈旅・四二〇・菅原道真)

山路花

五二 山桜^{やまざくら}見^みつつ我^わが来^こし木^きずゑさへ^又またしら雲^うになにまが^らむ

【合点】 為遠・耕雲

【詞書】 「山路の花」。

【口語訳】 山桜を折ることもできず見るだけで帰って来たあの梢さえどうしてまた白雲に紛れているのだろう。

【語釈】 ●見つつ我が来し―【参考】貫之歌の二・三句目を摂取。●しら雲―「しら」に「白(雲)」と「知ら(ず)」とを掛ける。

【参考】「山高み見つつ我が来し桜花風は心にまかすべらなり」(『古今集』春上・八七・紀貫之)

見花

五三 なれゆくを友とは花^{はな}も思^{おも}ふらむそむる心^{こころ}の色見え^みずとも

【合点】 善成

【詞書】 「見る花」。『千首』題。

【口語訳】たびたび眺めて打ち解けてゆくので、友だど花も思うのだろう。深く思うその心の色は見えないけれど。

【語釈】●なれゆくを―花を見慣れているので。桜を擬人化しているので、打ち解けて、と訳した。●思ふらむ―「らむ」は現在推量の助動詞で終止形。ここで切れ、三句切れ。●そむる心の色―「心の色」は深く思い込んでいる心の様子。「そむる」は「染む」で「色」の縁語。

【参考】「年ごとにそむる心のしるしあらばいかなる色に花のさかまし」（『新後拾遺集』春上・九一・登蓮法師）

野花留人

五四 み吉野をいまさら宿^{やど}とたのむ身は花にやとまる心なるらむ

【合点】善成

【詞書】「野の花人を留む」。藤川百首題にも見える。題意は『初学一葉』に「此の題秋にも出たれど、こゝにては勿論春なり。花のおもしろきにめで、かへりもやらぬ心なり。或は終日花にかり暮して帰るさを忘れたる心をいひ、又はこの本に日数をかさねたる心をも読むべし。」とある。

【口語訳】み吉野を今になってまた宿と頼みにする我が身は花に留まる気持ちなのだろうかしら。

【語釈】●み吉野―大和国の歌枕。四四番歌参照。●いまさら―改めて今、の意。●宿―「とまる」は縁語。●下句―「にや」は疑問を表す。「らむ」は現在推量の意で、「や」を受けて連体形。

【参考】「花ゆゑにいまさら訪はば我が家とたのむよしのも道やたどらむ」（『新玉津島社歌合』五十番・「尋花」・右・頼阿）

海辺花

五五 影うつす磯山桜咲きしより波の花にも春は見えつつ、

【合点】 善成・耕雲

【詞書】 「海辺の花」。

【口語訳】 海に影を映す磯辺近くの山にある桜が咲くやいなや、波にも花が映って春の景気が見えることだ。

【語釈】 ●磯山桜―磯辺にある山に咲く桜。 ●咲きしより―「し」は過去の事実を表す助動詞「き」の連体形に「より」が接続し即時の意味を表す。咲くとすぐに。 ●波の花にも春は見えつつ―白い波頭を花に見立てた表現に波に山桜の影が映る様子を重ねる。

【参考】 「海士の住む磯山桜散る花の波かけ衣袖匂ふらし」（『続草庵集』九四・「御子左入道大納言、蔡花園に歌よまれし時、海辺花」）、「志賀の浦の波の花こそ影うつす比良の高嶺の桜なりけれ」（『新葉集』春下・九〇・藤原光任）

河辺花

五六 吉野河木ずゑの花の陰なれや流れもやらぬ水のしら波

【合点】 為遠・耕雲

【詞書】 「河辺の花」。

【口語訳】 吉野川では梢の花の陰なのだろうか。流れが滞って水の白波が立っている。

【語釈】 ●吉野河―大和国の歌枕。四四番歌参照。 ●陰なれや―「や」は疑問の意。三句切れ。 ●流れもやらぬ―「遣る」は（水を）流れ行かせる、の意。

【参考】「小初瀬の花のさかりやみな河峰よりおつる水の白波」（『新後拾遺集』春下・八三・藤原清輔）、「桜花咲きぬる比は山ながら石間行くてふ水の白波」（『拾遺愚草』一三二三）

【補説】「河辺花」題は『草庵集』（二七〇）にも見え、続く配列は「折花」（二七一～二七四）となり、当歌集と同じ。

折花

五七 逢（ふ）人は問へど答へずかへるさにたをりてかざす花のところを

【合点】善成

【詞書】「折る花」。『千首』題。

【口語訳】すれ違って逢う人は尋ねてみても答えてくれません。帰り際に手折ってかざす花の咲く場所を。

【語釈】●逢ふ人は―花見に行く道すがらすれ違う人は。●問へど答へず―二句切れ。「山吹の花色衣主や誰問へど答へずくちなしにして」（『古今集』雑体・一〇二二・素性法師）。

【参考】「いしばしる滝なくもがな桜花たをりてもこむ見ぬ人のため」（『古今集』春上・五四・読人しらず）

惜花

五八 春を経て待つも惜しむもかこつ身を憂しとや花の思ひしるらむ

【合点】善成

【詞書】「惜しむ花」。『千首』題。

【口語訳】春を過すごして、花が咲くことを待っているのも、花が散ることを惜しむのも、どちらも嘆くわが身を憂うれっているのだと花が思い知るのだろうか。

【語釈】●憂しとや花の思ひしるらむ―「や」は疑問の意の係助詞を受けて「らむ」は現在推量の助動詞の連体形で係り結び。

【参考】「年を経て待つも惜しむも山桜花に心をつくすなりけり」（『続拾遺集』春下・九一・西行法師）、「春雨の降るは涙か桜花散るを惜しまぬ人しなければ」（『古今集』春下・八八・大伴黒主）

【補説】西行歌へのオマージュ。加えて【参考】古今歌で花が散ることを惜しむ人はいないと一般化している点をわが身のこととしている。

落花

五九 ななごりとは思おもふものから散ちる花はなにたぐふもつらきわが心かな

【合点】善成

【詞書】「落花」。永久百首題。『千首』題。

【口語訳】花が咲いた余韻だと思ふそばから散る花に寄り添うのもつらい私の心であるよ。

【語釈】●なごり―名残に「波残り」を響かせ、【参考】貫之歌を想起させるか。●たぐふ―一緒に。添う。「散る花」に「たぐふ」とする【参考】躬恒歌をも踏まえるか。

【参考】「桜花散りぬる風の名残には水なき空に浪ぞ立ちける」（『古今集』春下・八九・紀貫之）、「とどむべき物とはなしにはかなくも散る花ごとにたぐふ心か」（『古今集』春下・一三二・凡河内躬恒）

花の歌として

六〇 水馴れ竿散り交ふ花のしら浪を空にもわくる宇治の川舟

【合点】 良基

【詞書】 「花の歌を詠みました」。

【口語訳】 水馴れ棹をあやつって散り交う花でできた白波を空にも分ける宇治の川舟。

【語釈】 ●水馴れ竿——『能因歌枕』には「みなれさをとは、舟さすさを、云」、『隆源口伝』には「水馴竿、ぬれたる棹をいふ。四条大納言舟さす棹をいふ、イ本云、水に馴れたる船棹をいふ」とある。●空にもわくる——「わくる」に「(白波を) 分け行く(川舟)」と「(川舟が白波を) 分けて(舞い散る桜とする)」とを掛ける。

【参考】 「水馴れ竿岩間に波はちかへどもたゆまずのぼる宇治の河舟」(『続千載集』釈教・九六二・藤原定家)、「風をいたみ山こぐ我は舟なれや花の白浪わけてきつれば」(『拾玉集』「花月百首」・一三三四)

【補説】 宇治川に舞い散る花の様子を、棹さしながら白波を立てて流れる川を下る舟がしぶきを上げて進む様子に重ね合わせた。

曉庭落花

六一 かすみゆく在曙の月はそれとだにまがはぬ庭の花の雪かな

【合点】 為遠・善成

【詞書】 「曉の庭の落花」。藤川百首題にも見える。題意は『初学一葉』に「晨明の月のをしきをいひ、寢覚の事を詠ずれば、自ら曉の心になれり。散る花の名残をかこつに取りては風をうらみこと、ふ人の稀になり行く風情

などをいふべし。（略）」とある。

【口語訳】霞んでゆく有明の月はそれだとさえ紛うことのない庭の花が舞い散り雪のように見える。

【語釈】●かすみゆく在曙の月―初二句で題の「暁」を表している。

【参考】「あさぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪」（『古今集』冬・三三二・坂上是則）

【補説】月の光を白雪に見立て、その雪を落花に見立てる。同題の類歌に「庭白く散りしく花の雪の上にかすま
でうつる在明の月」（『菊葉集』二三二・従三位政子）がある。

庭落花

六二 枝にしもさのみしたはで桜花^{さくら}散^ちり敷^しく庭をさかりとやみむ

【合点】為重

【詞書】「庭の落花」。

【口語訳】枝に咲いた桜ばかりを慕うことなく、桜花は、庭に散り敷いているのを盛りと見ようか。

【語釈】●枝にしもさのみしたはで―「にしも」打消表現」で強調の意を表す。「枝に（咲く桜）だけを慕わずに」の意。

【参考】「散る花を又吹きさそふ春風に庭をさかりとみる程もなし」（『新後撰集』春下・一三八・「入道前関白家にて、庭落花といへる心を読み侍りける」・京極為兼）

堇

六三 庭の面は道もなきまで咲きにけり誰この宿にすみれ摘むらん

【合点】 良基

【詞書】「堇」。堀河百首題に「堇菜」がある。

【口語訳】荒れ果てた庭の面には通る道もないほどに咲いたのだな。誰がこの宿でスマレを摘むのだろう。

【語釈】●すみれ―「すみ」に「住み」を響かせる。

【参考】「いその神古りにし人を尋ねれば荒れたる宿にすみれ摘みけり」(『新古今集』雑中・一六八四・「西院辺に、はやう相知れりける人を尋ね侍りけるに、すみれ摘みける女、知らぬよし申しければ、よみ侍りける」・能因法師)

【補説】【参考】の能因歌などを踏まえて荒れ果てた宿の庭に咲くスマレの花を詠んだ。

百首の歌よみ侍りしに

六四 咲きしより立ちも立たずもしら波のかたえにかかるおふの浦なし

【合点】 良基

【詞書】「百首の歌を詠みました中に」。「百首歌」の詠歌年次は不明。

【口語訳】花が咲いてから立ったり立たなかったりすることも分からない白波が片方の枝にかかっているおふの浦には梨が生っているよ。

【語釈】●しら波―「白(波)」と「知ら(ず)」とを掛ける。●かたえ―片方の枝。●おふの浦―『袖中抄』(第十六「をふの浦」)には【参考】古今集歌の注として「をふの浦は伊勢国にあり。斎宮御庄猷梨所也」とある。

●なし——「梨」に「（ない）の意の）なし」を響かせるか。

【参考】「おふの浦に片枝さしおほひなる梨のなりもならずもねて語らはむ」（『古今集』東歌・一〇九九・「伊勢歌」）

【補説】【参考】歌の「なりもならずも」という表現を踏まえ、「立ちも立たずも」とし白く咲く梨の花を波に見立てて詠んでいる。

蛙

六五 浮き草のさそはれわたる水の面におのが音たえず鳴くかはづかな

【合点】善成

【詞書】「蛙」。永久百首題。『千首』題。

【口語訳】浮き草に誘われ続ける水面に自身の鳴き声を絶えることなく鳴き続ける蛙なのだ。

【語釈】●浮き草——水面に浮かび根が固定されていない草。●かはづ——『和歌作式』には「若詠蛙時 かはづと云」とある。

【参考】「みがくれてすだくかはづのもろ声にさわぎぞわたる池の浮き草」（『後拾遺集』春下・一五九・良暹法師）

【補説】【参考】に挙げた良暹法師の歌では蛙の鳴く声で浮き草が揺れるとする。当該歌では浮き草の水の流れに揺れる様子が蛙を誘っていて、それに促されて蛙が鳴くとする。

里款冬

六六 山吹ぞあやなく咲ける花見むとううべき賤が垣根ならぬに

【合点】 善成

【詞書】 「里の款冬」。『千首』題。

【口語訳】 山吹は甲斐もなく咲いている。花を見ようと（あの人が訪れると思って）植えたであろう、貧しい者の家の垣根ということではないのに。

【語釈】 ●山吹ぞあやなく咲ける―「ぞ」は係助詞。「あやなし」はここでは咲く意味がないの意。「咲ける」係り結びで二句切れ。●花見むと―【参考】 古今歌を踏まえるので、花を見ようとしたのは古今歌に見える「君」と捉えた。●ううべき―底本「とふべき」の「と」をミセケチ、その右傍に「う」と記され「うふ」とある。「植うべき」。

【参考】 「山吹はあやななさきそ花見むとうゑけむ君がこよひこなくに」（『古今集』春下・一二三・読人しらず）
 【補説】 【参考】 古今歌で、山吹の花を見ようと植えた人が今宵は来ないから甲斐がないとすることを踏まえ、初句で「山吹ぞ」と強調する。

藤花随風

六七 咲く藤のなびくを見ればうづもる松にも風ぞなほのこりける

【合点】 為遠

【詞書】 「藤花風に随ふ」。藤川百首題にも見える。題意は『初学一葉』に「藤は春の末に咲くなれば、暮行く春

のけしきをいひ、池のおも松にかゝれる様を読むべし。紫の雲にまがへてもよめり。風に随ふの心よくいひおほせ侍らん事、肝要なるべし。」とある。

【口語訳】花房がこぼれんばかりに咲いている藤の花がふさふさとなびいている様子を見ると、埋もれている松にも風が変わらずに残っているのだな。

【語釈】●うづもるる松―満開に咲き誇る藤の花に松が埋もれている。●風ぞなほのこりける―係助詞「ぞ」と詠嘆の意の「けり」の連体形で係り結び。

【参考】「吹くからに松の藤波なびくなり春をば風にまかせざらん」（『新続古今集』春下・二〇〇・津守国冬）

暮春藤

六八 春ははやいくかもあらじまつ吹^ふけばかかれる藤の色ぞうつろふ

【合点】なし。

【詞書】「暮春の藤」。

【口語訳】春は早くも幾日も残ってはいまい。まず松に風が吹けばかかっている藤の花の色はうつろうことだ。

【語釈】●まつ吹けば―「まつ」は「松」で「まづ」を掛けるか。●かかれる藤の色―【参考】のように松に懸かった藤が詠まれる。

【参考】「紫の藤咲く松のこずゑにはもとのみどりも見えずぞありける」（『拾遺集』夏・八五・源順）

暮春

六九 とまらぬもよしやうき世のならひぞと思ひなぐさむ春の暮かな

【合点】 善成

【詞書】 「暮春」。

【口語訳】 とまらずに過ぎ去ってゆくのもよいであろう。これも憂き世の中の決まりだと思い慰める春の暮れだな。

【語釈】 ●とまらぬもよしや―【参考】 歌の二句目を踏まえ、時の流れを止めることができないことも受け止め、「よしや」と肯定的に捉えている。「や」は間投助詞。

【参考】 「待てといふにとまらぬものとしりながらしひてぞ惜しき春の別は」(『新古今集』春下・一七二・読人しらず)

三月尽

七〇 ゆく春をただなほざりに慕ひきてさらにおどろく今日の別れ路

【合点】 良基

【詞書】 「三月尽」。堀河百首題。

【口語訳】 過ぎ去ってゆく春をなんとなく慕ってきて、いまさらはつと気づいた今日が三月尽でお別れの日だよ。

【語釈】 ●さらに―春が過ぎ去っていくことが決定的となり、その事実に対して抵抗する気持ちを事新たにいうまでもないが。という意を込める。●今日の別れ路―『為尹千首』に「かひなしや心は春にそふとてもかへりみもせぬけふのわかれ路」(春・一九七・「惜三月尽」)と見える。

【参考】「ゆく方もしらぬ春とは知りながら心尽くしのけふにもあるかな」（『堀河百首』三〇五・藤原公実）

七一 花鳥^{とり}の別れ^{わか}にかなてならずは今日^{けふ}行く春^ゆをなほや慕^{した}はん

【合点】 為重・耕雲

【詞書】 七〇番歌「三月尽」題を受ける。

【口語訳】 花や鳥との別れにかなてからなじんでいなければ今日去りゆく春を変わずに慕ってしまうことですよ。

【語釈】 ●ならずは——「ならふ」は経験を積んでよく理解している。慣れる。「ず」は打消の助動詞の未然形。「は」は接続助詞。順接の仮定条件を表す。今まで経験していなければ、の意。先行例として「都にておぼつかなさならはらずは旅寝をいかに思ひやらまし」（『詞花集』別・一七二・民部内侍）がある。

【参考】「とどまらぬ別れのみかは花鳥の名残につけて惜しき春かな」（『玉葉集』春下・二七三・「暮山の心を」・平宗宣）

以下、『源経氏歌集』 四季部注釈稿（中）（下）に続く。